

中世なぞから近世なぞへ

岡野 幸 夫

Yukio Okano : The Development of Medieval Riddles in the Edo Period

なぞなぞの発想法に注目して、三段なぞがなぜ、どのように成立したかについて考察した。その結果、三段なぞは、なぞなぞの享受法(遊び方)の変化を要因として、「連想」を用いた二段なぞをもとに、「連想」のプロセスをもう一つ増やすことによって成立したことを主張した。また、なぞなぞと絵との関係についても若干述べた。

キーワード：なぞなぞ 発想法 二段なぞ 三段なぞ 享受

一 はじめに

本稿は、中世(主に室町時代末期〜桃山時代)のなぞなぞ(以下「中世なぞ」と略称)から近世(主に江戸時代後期〜末期)のなぞなぞ(以下「近世なぞ」と略称)への展開をたどり、近世なぞがいかにして成立したかについて考察するものである。これにより、日本語文化としての「なぞなぞ」の特質を解明するための一階梯としたい。

研究の方法として、「なぞなぞの出題の発想法」(以下、単に発想法と略す)の変化に注目する。発想法とは、なぞなぞがなぞなぞとして成立するための構造とでもいうもので、たとえば、

梅の木を水に立て替へよ(天理図書館本『なぞたて』24)

というなぞなぞは、「梅」字の木偏を水偏(氵)に置き換えて、答えの「海」字を導き出すものである。この場合、漢字をなぞなぞの文言にしたがって「操作」するという発想で作られたなぞなぞということができる。筆者は、「操作」の他に「言換」「連想」という発想法を認定している。詳細は拙稿^(註)および本稿三・一を参照されたい。

発想法に注目することにより、なぞなぞの歴史の変遷について、なぞなぞの享受層の変化に左右されにくい分析が可能になると思われる。本稿では、中世なぞの発想法と近世なぞの発想法を比較し、変化の要因を探る。さらに、中世なぞと近世なぞとは、なぞなぞの形式においても大きな変化がみられる。それは、中世までは先の例のよう

な「問」と「答」がセットになった形式の「二段なぞ」しかなかったのに対し、近世には「AとかけてBと解く。その心はC」(例:「土葬とかけて鶯と解く。その心は梅に来て鳴く〔埋めに来て泣く〕」【頼御伽なぞ】)という形式の「三段なぞ」が生まれた、ということである。このなぞなぞの形式の変化の要因にも言及したい。また、近世には衰退したと考えられている二段なぞが、伏流水のように伝存していることも指摘する。

二 先学の研究

注一拙稿でも述べたが、日本のなぞなぞ研究は、従来は鈴木(二九八一b)の独擅場であった。しかし、最近になって荻生(二〇〇七)が公刊された。これは、日本の言葉遊びを網羅的に集成し、分類整理した事典で、その第10章がなぞなぞにあてられている。また、鈴木の研究をふまえた小野(一九九九)の研究もある。ここでは、鈴木と荻生の研究により、中世なぞから近世なぞへの展開について、どこまでが明らかになっているかを確認する。(注3)

まず鈴木は、中世に大きく発展した二段なぞが、近世に入ると次第にマンネリ化し、新趣向の三段なぞが登場したことにより完全に衰退した、と述べている(第七章・第八章)。二段なぞが次第に衰退した要因については、まず大きな時代背景として、

(筆者注:中世末期〜近世初期には)すでに「なぞなぞ」は、新たに、作られるものではなくって、知っている「なぞ」を人に掛けたり、また掛けられた「なぞ」をおぼえておいて書きとめたりするという時代になっていた。(注4)

という状況を指摘する。さらに、言語や風俗の変化により古典的ななぞが次第に難解なものとなったため、安易な改作を行ったり、簡単ななぞだけを選択して伝承したりした結果、

古典「なぞ」の単調化は、読者の解読力の低下と相まって、いよはなはだしくなり、形骸化と評してよい状態に達した。(注5)

と述べている。そして、三段なぞが登場したことについては、

これ(筆者注:三段なぞ)は、古典「なぞ」の間と答の二段形式に、落、ち、を付けたものと見ることが出来る。古い「二段なぞ」においても、解き方の説明を、その心は、などという詞で説明した例が見られた。いわば第三段は潜在したのである。これを表面に出して、その機能を最大限に發揮させたのが「三段なぞ」である。それは洒脱な味わいを生命とし、何よりもまず明るく好笑的であった。(注6)

と述べている。三段なぞの成立年代について、鈴木は、文献などの徴証から、その萌芽は近世初期から認められるが、普及したのは享保年間(一七一六〜三六)前後のことと推定している。また、三段なぞの形式のもととなった発想については、

三段なぞ型の発想は、新しいというよりはむしろわが国の文芸において是最も馴染みの深いものであったといってもよい。和歌と「三段なぞ」とでは、一見無縁の存在のように見えるが、実は和歌の発想においても三段なぞと共通な発想が常に行われていた。(注7)

として、「我が恋は汐干に見えぬ沖の石の人こそ知らね乾くまもなし」の和歌などを例に出している。(注8)三段なぞと共通の発想というのは、「私の恋(トカケテ)潮が引いても決して見えない沖の水底の石(ト解ク)(心ハ)他人には分からないだろうが、涙で乾く間もないのだ」とい

う構造になっている、というのである。

この他、二段なぞから三段なぞへの展開とは別に、中世末期から近世初期のなぞなぞについて、次のような興味深い指摘もしている。

幾通りもの解き方がありうる場合、相手がその中の一つをもって答えると、わざとそれを否定して、別の答で応ずることもありうるわけで、そうしたあまのじゃく的な面白さをねらった「なぞ」

もあつた。(中略)このように答えが一つに限定されないなどにしても、いま述べたように、最初から答が幾通りもあつたわけではない。作者の予期せぬ答がとび出し、それも悪くないということになって追加され、最後に総合されるのである。^(注1)

として、いくつかの例を挙げてみる。たとえば「西」という一文字のなぞなぞは、「人丸(=日泊まる(日没))」「御台所(=見たい所(西方浄土))」「産前産後(=「西」の「に」(2))は3の前、「し」(4)は3の後)」などさまざまな答が考案された、とある。これは、鈴木はとくに言及しないが、三段なぞの成立を考える上で見逃せない事象だと考えられるので、第四節であらためて検討する。

次に荻生は、二段なぞについて、

〔二段なぞ〕は古くから民間伝承(謎なぞ)として普及したが、

江戸時代に〔三段なぞ〕が開発されると急速に衰退し、以降は幼童の口遊びと化した。^(注2)

と述べる。三段なぞについては、

〔三段なぞ〕の発祥は享保頃(一七一六〜三六)とされている。

ただし、その母体になる発想形式は、寛永期(一六二四〜四四)すでに現れている。(中略)以来明治まで〔三段なぞ〕は謎なぞの代名詞よろしく君臨した。^(注3)

と述べる。二段なぞから三段なぞへの展開の要因については、とくに記述が見られない。最新ともいえる研究成果においても、歴史の変遷についての言及がないのがなぞなぞ研究の現状である。ただし荻生の書自体は、なぞなぞをはじめ、言葉遊びの形式(遊び方)を網羅し、実例とともに簡明な解説を加えており、非常に参考になる有用な書である。図版も多く、見て楽しめる書でもある。

ここまで、鈴木と荻生の研究から、二段なぞ・三段なぞに関する部分を概括した。その結果、中世に隆盛を極めた二段なぞは、近世に入ると単調なものになり、江戸中期に三段なぞが普及すると、衰退していった、という変遷があつた、とされていることが分かった。このことは、鈴木・荻生による丹念な文献調査から導き出されたことで、事実としては動かないことだと思われる。残る問題は、なぜ、どのようなにして三段なぞという新しい形式が生まれたか、についての解釈である。これについて鈴木は、新たな形式を求める機運が高まっていたこと、従来の形式に内在する要素が表面化したこと、新たな形式は従来の韻文にも見られる発想で、人々に受け入れられやすかったこと、を指摘する。筆者も大筋でこの考え方に賛成するものであるが、いくつか気になる点がある。

一つは、前述したように、一つのなぞなぞから複数の答が導き出せるものが存在する、ということである。このようななぞなぞは、出題者の恣意で正解を左右できる点でアンフェアであり、問う側と答える側、という従来のなぞなぞ行為の構図を成り立たなくさせてしまうものではないか。^(注4)鈴木が言うように、複数の答が出せること自体に楽しみを見出していたのだとすると、それはもはやなぞなぞとしては異質であり、なぞなぞの享受法(遊び方)が変質したことになる。この点

を、三段なぞの成立と関係付けて説明する必要がある。

もう一つは、二段なぞは本当に衰退したのか、ということである。

衰退したといっても、現在行われているなぞなぞの形式の多くは二段なぞであり、三段なぞは落語家の専門芸としてときおり目にするにすぎない。しかもそれは、落語家が一人でテンポよくカケ・トキ・ココロを話してしまうので、問う側と答える側、という構図にならない。このことは、見方を変えると、三段なぞは江戸時代にだけ花開いた特殊な形式だ、とも言えるのではないか。なぞなぞの形式全体の歴史的変遷を、文献資料に即して把握する必要がある。

これらの問題を考察する上で、発想法に注目することが有効だと考える。なぞなぞの享受層の変化を受けにくく、なぞなぞの核心部分の歴史の変遷を分析するのに有効だと思われるからである。鈴木も荻生も、この観点からの考察は行っていない。今回、新たな視点で考察することで、なぞなぞの言語文化としての特質が明らかにできるかもしれない。以下、具体的な検討に移る。

三 二段なぞの発想法

本節では、中世末期に成立した二段なぞの文献を二種取り上げ、発想法の観点から分類し、比較する。これにより、中世に最も栄えた二段なぞが中世末期にどのような様相を呈していたかを明らかにする。本稿の趣旨から言えば、近世前期に成立した二段なぞの文献についても同様な調査を行う必要があるのだが、筆者の調査が未だ及んでいないため、近世前期の様相については鈴木（一九八一b）の研究によることとした。

取り上げる文献と主な書誌情報は以下の通り。

①『なぞたて』天理図書館蔵 写本一帖^(注13)

編著者未詳、成立年代未詳、「永正十三（二五二一）年正月廿日（花押）」の奥書あり、後奈良院（一四九六〜一五五七）の宸筆とする極札あり、全一九六題（番外二題を含む）を収める。

②『月菴醉醒記』吉田幸一氏蔵 写本一冊^(注14)

一色直朝（？〜一五九七）編著、天正初年（一五七三）頃成立か、椎本文庫（橋守部）の蔵書印あり、各種教養的事項を幅広く採集整理した書物でなぞなぞの項はその一部、著者自筆本か、全六三題を収める。

右のうち、文献①については、注一拙稿において、発想法の観点から整理し、分析を加えた。本節では、行論の都合上、注一拙稿の集計表に若干手を加えて再掲し、文献②との比較に供したい。

表1・2の構成は、縦軸に発想法、横軸にその発想法の使用回数を取っている。発想法は三種類あるので、網羅的には①〜⑦までの七種類が存在しうる（ただし、文献①においては⑦は存在しない）。横軸の発想法の使用回数は、複数の発想法を組み合わせて作られたなぞなぞに、同じ発想法がいくつ含まれるかを内訳で示している。たとえば、①言換の1回であれば、そのなぞなぞは一回の言換で作られていることを示し、③操作の3回であれば、そのなぞなぞが三回の操作を経て答を導き出すものであることを示す。一般に、回数が多いほど複雑ななぞなぞであるということが出来る。

三・一 文献①『なそたて』について

注一拙稿において指摘したことと重複する部分もあるが、表1から読み取れることとして、次の二点がある。

●単独の発想法で作られたものが多い。

全体で196例見られるなぞのうち、約79%にあたる155例が単独の発想で作られていることから分かる。単独の発想法で最も多く用いられているのは「操作」で約35%である。この時代、連歌の賦物を応用した形式のなぞなぞが流行していたという、鈴木^(注)の指摘にも合致する傾向である。

●「言換」「操作」で作られたなぞなぞは、同じ発想を複数回用いているものが多い。

「連想」によるものは、一回だけで成り立つものが約85%にも達するのに対し、「言換」によるものは、二回用いるものが50%、「操作」では二回用いるものが約55%も存する。以下に実例を示し、解説を加えつつ、この点について考察する。^(注)

【言換の例】

(問)桜ところぐくにひらけたり

(答)花むらさき(15)

「言換」を二回用いた例である。答の「花むらさき」は紫草の花で、秋に咲く。問の「桜」をほぼ等価の別語「花」と言い換え、「ところぐくにひらけたり」からほぼ等価の別表現「斑咲き(ムラ)になって咲いている)」「紫」と言い換え、両者を合体させて答の「花紫」を導き出すのである。春の景物から秋の景物を導き出す面白みがある。このように、ほとんど等価と言えるものに置き換えて答えを導き出す発想

法を「言換」と名付ける。

【連想の例】

(問)ねり糸のまむすび

(答)徳大寺(17)

「連想」を一回用いた例である。問の「ねり(練)糸」は、生糸を精製し、膠質を除いて光沢を出し、手触りのよいものにした糸のこと。「まむすび(真結)」は、固く結ぶこと(俗に言う固結び)。滑らかな糸を真結びにすると、ほどくのが大変である。そこから「解く大事」と連想し、答の「徳大寺」を導き出している。このように、ある語句から自然に連想されるもの(この場合は練糸の固結びと解くのが大変であること)同士を連想によって結びつける発想法を「連想」と名付ける。「連想」は、等価^(注)ということの判断によっては「言換」と厳密に区別することが難しい場合もあるが、発想の本質としては異なるものであると考え、別立てにしている。

【操作の例】

(問)雪は下よりとけて水の上添ふ

(答)弓(4)

「操作」を二回用いた例である。問の前半「雪は下よりとけて」から、「ゆき(雪)」の下部分すなわち「き」が「とけて」なくなり、「ゆ」が残る。その「ゆ」に、問の後半「水の上そふ」から、「みづ(水)」の上半分すなわち「み」が「添う」てできる文字列は「ゆみ(弓)」、という具合である。このように、問の文字列を指示どおりに操作して答えが得られるパズルの発想法を「操作」と名付ける。

以上、筆者が認定する三つの発想法について、実例を示した。本題に戻り、文献①において「連想」によるなぞなぞはなぜ一回のみ用いたものが多いのか考えてみるに、これは思考の飛躍度と関連しているのではないかと思われる。どういふことかと言うと、「言換」は等価

な置き換えであるため、比較的考えやすい発想法であると言える。また「操作」は目の前にある文字列を指示どおりにいじるだけなので、パターンをある程度覚えてしまえば「言換」以上に考えやすい発想法である。これに対し「連想」は、自然な連想とは言いながら、「言換」「操作」に比べれば考えなければならぬ範囲が広くなるし、凝ったなぞなぞを作ろうとするほど、自然な連想ではなくなってくるため、難易度が高くなる発想法であると言える。このような発想法を複数回用いたなぞなぞは、難しすぎて敬遠されたのではないだろうか。同じ難しいものでも、「言換」「操作」によるものは理知的な思考なので、解く気が起こった、ということではなからうか。実際、これら三つの発想法の分布を見ても、「連想」によるなぞなぞは三回以上用いられたものはないのに対し、「言換」「操作」は三回用いられたものがあり、とくに「操作」は四回用いられたものもある。

三・二 文献②『月菴醉醒記』について

前項で文献①について指摘した点を踏まえつつ、表2から読み取れることを考察する。文献②には63題のなぞなぞが収録されているが、表2の合計は64ある。これは、3番のなぞなぞに二つの答が記されており、発想法が異なるため、二つ分に数えているためである。以下に3番のなぞなぞを示す。

(問) 一文字の折れ

(答) ひとつばし又かけ字(3)

問の「一文字」は「一」の字そのもの、また、或る一文字、の二通りに解釈できる。「折れ」とは「切れ端」のことである。したがって、①「一」の字そのものの切れ端から「ひとつばし(一端) 〓 一橋(地

名・家名)」という「言換」と、②或る一文字の切れ端から「かけ字(欠け字) 〓 掛け字(掛軸)」という「連想」の二通りの発想法が用いられていると考えられるため、二重に数えた。^(注16)

表2から読み取れるのは以下の二点である。

● 単独の発想法で作られたものは依然として多いが、減少している。

全体で64例見られるなぞなぞのうち、約70%にあたる45例が単独の発想で作られていることから分かる。この数字を文献①と比較すると、文献②ではやや割合が低くなっていることが分かる。逆にいえば、複数の発想法を用いたなぞなぞの割合が増えていることを示す。とくに、「操作」によるものが明らかに増えている。文献①では約35%だったものが、文献②では約47%になっている。「言換」「連想」によるものはそれぞれ10%前後ぐらいつししかない。このことは、文献①の成立年代から数十年後(二三世代後)の文献②の時代には、「操作」によるなぞなぞがいっそう好まれ、高度になっていくことを示すものだと考えられる。

● 「言換」「操作」で作られたなぞなぞは、同じ発想を複数回用いているものが多い。

文献①の傾向がますます強くなっていると言える。より細かく見ると、「連想」だけではなく「言換」でも単純化が進み、一回だけ用いたもので過半数(約57%)を占めるのに対し、「操作」では、一回だけ用いたものは約17%に過ぎず、四回用いたものも一例認められるのである。さらに、文献①では見られなかった、三種類すべての発想法を用いたなぞなぞも三例見られる。しかもこれらはすべて、いずれかの発想法が二回用いられている。

また、複数の発想法を用いたものについて細かく見ると、「操作」

表1：文献①『なそたて』

	合計	1回	2回	3回	4回	
①言換	34 (17.3%)	15 (44.1%) (12.8%)	17 (50.0%) (23.6%)	2 (5.9%) (33.3%)	—	155 (79.1%)
②連想	52 (26.5%)	44 (84.6%) (37.6%)	8 (15.4%) (11.1%)	—	—	
③操作	69 (35.2%)	26 (37.7%) (22.2%)	38 (55.1%) (52.8%)	4 (5.8%) (66.7%)	1 (1.4%) (100.0%)	
④言・連	17 (8.7%)	15 (88.2%) (12.8%)	2 (11.8%) (2.8%)	—	—	41 (20.9%)
⑤連・操	8 (4.1%)	6 (75.0%) (5.1%)	2 (25.0%) (2.8%)	—	—	
⑥操・言	16 (8.2%)	11 (68.8%) (9.4%)	5 (31.3%) (6.9%)	—	—	
⑦言・連・操	0 (0.0%)	—	—	—	—	0 (0.0%)
合計	196	117 (59.7%)	72 (36.7%)	6 (3.1%)	1 (0.5%)	

(注) 数値右の括弧内の％は最左欄の合計に対する百分率
 数値下の括弧内の％は最下欄の合計に対する百分率

表2：文献②『月菴醉醒記』

	合計	1回	2回	3回	4回	
①言換	7 (10.9%)	4 (57.1%) (15.4%)	2 (28.6%) (6.9%)	1 (14.3%) (14.3%)	—	45 (70.3%)
②連想	8 (12.5%)	7 (87.5%) (26.9%)	1 (12.5%) (3.4%)	—	—	
③操作	30 (46.9%)	5 (16.7%) (19.2%)	18 (60.0%) (62.1%)	6 (20.0%) (85.7%)	1 (3.3%) (50.0%)	
④言・連	1 (1.6%)	1 (100.0%) (3.8%)	—	—	—	16 (25.0%)
⑤連・操	8 (12.5%)	5 (62.5%) (19.2%)	3 (37.5%) (10.3%)	—	—	
⑥操・言	7 (10.9%)	4 (57.1%) (15.4%)	2 (28.6%) (6.9%)	—	1 (14.3%) (50.0%)	
⑦言・連・操	3 (4.7%)	—	3 (100.0%) (10.3%)	—	—	3 (4.7%)
合計	64	26 (40.6%)	29 (45.3%)	7 (10.9%)	2 (3.1%)	

(注) 数値右の括弧内の％は最左欄の合計に対する百分率
 数値下の括弧内の％は最下欄の合計に対する百分率

に関連するものがほとんどすべてであることに気づく。表中、④は当然「操作」を含まないが、その例は一例しかない。⑤⑦はいずれも「操作」が関係し、しかも二回以上用いた例(⑤の二回の3例・⑥の二回の2例と四回の1例・⑦の二回の3例)合計9例は、うち7例が「操作」を二回以上用いているのである。

以上、二点を指摘したが、これらのことをまとめると、中世の二段などは、中世末期には高度に複雑化し、「操作」によるものが主流となっていたことがうかがわれる。この点が、近世の三段なぞではどのようなになっているかを、次節で検討したい。

四 三段なぞの発想法と二段なぞの関係

本節では、前節に引き続き、近世に成立した三段なぞの文献を二種取り上げ、発想法の観点から分類し、比較する。これにより、中世に認められた「操作」中心の高度ななぞなぞが、江戸時代にはどのような様相を呈しているかを明らかにする。

取り上げる文献と主な書誌情報は以下の通り。

③『なぞ』茨城県立歴史館蔵 刊本一冊^(注17)

編著者未詳、十八世紀中期江戸刊、上中下三冊本の中巻か、水戸藩士長谷川家旧蔵、裏表紙見返「嘉永五(一八五二)年壬子五月吉日 長谷川虎之介」墨書あり、絵入り、全十題を収める。なお、書名は仮題。

④『黒繻子の帯』刊本一冊^(注18)

編著者未詳、文久二(一八六二)年頃刊、絵入り、収録題数未詳(渡辺(二〇〇〇)には三十一題を抄録)。なお、書名は仮題。

四・一 三段なぞの発想法

文献③および文献④に現れる三段なぞの発想法を検討した結果、すべてのなぞなぞが連想によるものであることが明らかになった。

一、二例を掲げて説明する。

●(問)南京あやつりとかけて (答) ちびす三郎と解く (心) たいをつる (文献③『なぞ』1)

問の「南京あやつり」とは、いわゆる操り人形で、江戸初期からある。答の「ちびす三郎」は、七福神の一つ、恵比寿神である。心の「たいをつる」は、操り人形から、糸で「体を吊る」を連想し、また、恵比寿神から「鯛を釣る」を連想するという、同音異義による連想を働かせたなぞなぞである。問と答に共通する同音異義を連想する点が三段なぞのミソである。

●(問)としま (答) 三月二十九日 (心) はるくれる (文献④『黒繻子の帯』)

問はお年玉のことで、年始の祝いの贈答品を指す。答は旧暦三月の月末のこと。翌日からは四月で、季節の上では夏になる。心の「はるくれる」は、お年玉から「春(に)くれる(物)」を連想し、三月末から「春(が)暮れる」を連想するという、これも同音異義による連想を働かせたなぞなぞである。

右の他のなぞなぞについての説明は紙幅の都合上、省略したが、いずれも同様のものばかりであった。よって、一覧表を作成する必要もないと判断した。すべて連想を用いたなぞなぞである。

つまり、江戸後期に出版された三段なぞの文献では、「連想」によ

るものしか見られないことが分かった。ここには、「操作」が主流であった中世末期の状況とはずいぶん大きな隔たりがある。このギャップをどう考えるか、次項で説明を試みたい。^(注19)

ちなみに、地方に口頭で伝承する三段なぞについては、鈴木(一九八一a)の「三段なぞA」^(注20)を検討した結果、これも「連想」によるものばかりであった。また、

・明治時代以降の風俗(一円札・自動車・汽車・巡査・製紙工場・蓄音機・電話・日露戦争・満州事変など)が織り込まれているものがまある

・文献のなぞなどと重複するものがかなりある

ということから、全体的に江戸中期より遡ることはできず、古くても江戸時代(享保年間)以降に文献のなぞなぞからひろまったものが伝承されているらしいことが分かった。

四・二 二段なぞとの関係

本項では、中世の二段なぞから、近世の三段なぞがどのように生まれたか、また、主流となる発想法が、なぜ「操作」から「連想」へと移行したのか、考察する。

まず、二段なぞ・三段なぞの構造を、前掲の例をもとにして左に図式化してみる。

●二段なぞ

(問) ねり糸のまむすび (答) 徳大寺
(連想) ← = (同音異義)

●三段なぞ

(問) としだま (答) 三月二十九日 (心) はるくれる
(連想) ← 解く(のが)大事 → (連想)
春(に)くれる || 春(が)暮れる
(同音異義)

右の図式から、二段なぞと三段なぞの違いを考えてみると、二段なぞでは、問から連想された語句がそのまま同音異義の答に結び付けられているのに対し、三段なぞでは、問から連想された語句をもとにして、同音異義の語句ができ、さらにそこから答を連想する、という違いがあることが分かる。つまり、「連想」のプロセスが一回多くなっていることが分かる。第二節で鈴木(一九八一b)を引用(注六の箇所)したが、彼が言うように、潜在した第三段を表面に出した、という単純な構造ではないのである。^(注21)

それではなぜ、三段なぞのような形式が生まれたのだろうか。ここで、第二節で指摘した、一つのなぞなぞから複数の答が導き出せるものが存在することへの疑義が想起されるのである。つまり、なぞなぞの享受法(遊び方)が変わってきたのではないかと考える。

中世末期には、なぞなぞは高度に複雑化し、一つのなぞなぞから複数の答が導き出せたり、問が短すぎたりして、それだけでは考える糸口すらつかめないものも存在する、という状況になっていた。短すぎ

る問としては、第二節に掲げた「西」の他、次のような例がある。

(問) 地 (答) 乞食(文献①『なそたて』73)

これは、問の「地」を「乳」と見なし、「乳は子どもの食べ物」というところから「子(の)食」と言い換えたものである。このような二段などは中世末期のさまざまな集成本にはよく見られ、鈴木も「このような機智的な短いなぞに対する嗜好は、戦国以後のいちじるしい流行だったようであり、古典「なぞ」がその衰滅を前にして最後に開拓した注目すべき分野であった」と述べている。^(注22)

このような状況下では、問を出す側と答える側、というなぞなぞ行為の関係が成立しにくくなる。代わりに、問と答のセットを出して、問から答へのプロセスを考えさせる、といった享受法が編み出されたのではないか。その場合、問と答の組み合わせは意外なものほど面白いということになり、その点、従来の二段なぞでこれをする、すぐに分かってしまい、つまらなかつたのだらう。そこで、「連想」のプロセスを一つ増やして簡単には解けないようにしたのではないだろうか。このようにして、三段などは生まれたのだと考える。

どうして「連想」を用いたものばかりなのかというと、三段なぞの「心」を隠す上で、最も好都合な発想法だった、ということだろう。これは、前掲の三段なぞの図式中、「連想」の発想部分を他の発想法に変えてみるとよく分かる。「操作」にした場合、同じ結果になる文字列の操作を二回行ってもそれほど面白いとは思えない。また、「言換」にした場合、なぞなぞに仕立てることは可能だが、「連想」より発想の飛躍が狭いため、工夫がしにくいと思われる。

以上、発想法を手がかりにして、三段なぞがどのように成立したかについて考察した。次節では、近世末期の二段なぞについて、若干の

検討を加える。

五 近世なぞと絵

近世中期に三段なぞが勃興した後も、二段なぞは絶滅したわけではなかった。多少すがたを変えて生き残っていたのである。本節では、近世末期の二段なぞの文献に現れるなぞなぞを検討し、近世なぞを総合的に考察する端緒としたい。

取り上げる文献と主な書誌情報は以下の通り。

⑤ 『誹風たねふくべ』刊本全十八冊^(注23)

式亭三馬編、初集天保十五(一八四四)年刊、終集嘉永四(一八五二)年刊、高名句のなぞなぞ句集、絵入り、収録題数未詳(渡辺(二〇〇〇)には101題を抄録)。

この文献にみられるなぞなぞは、いちおう二段なぞの形式になっているが、なぞなぞ句集であり、問はすべて川柳になっている。そして、テーマ(答を考える範囲を示すもの)は示されているが、答が記されていない。中世までのなぞなぞ集成本は、編著者の手控的な要素があり、問も答も連続して淡々と書かれていたが、この文献では読み手が正解を想像するしかない。ただし、強力なヒントとして、絵が付いている。以下に一、二例を示す。

● (問) きみは今 駒形あたり 舟の内 (テーマ) 冬商物

問の「駒形」は、浅草の渡し場のことである。また、「舟の内」から舟に乗っていることを連想する。これらと、テーマの「冬商物」から、答の「浅草海苔(乗り)」を導き出すのである。絵は、まさに浅草海苔が描かれている。

●(問) 兄貴のむすめ お百度を十たびあげ (テーマ) 呉服考

問の「兄貴のむすめ」を「言換」ると「姪(めい)」が得られる。

また、お百度参りを十回すると千回になる(数字の「操作」)。これらとテーマの「呉服考」から、着物の生地の種類「銘仙(姪千)」が導き出される。絵は、お百度をあげている着物姿の女性が描かれている。

これらのなぞなどは、問だけではどうい答を導き出すことはできないが、テーマや絵を手がかりにして解いていく、というものである。

発想法の観点からは、まだ集計はしていないため具体的な数値を出すことはできないが、一見したところでは、右の二例からも分かるように、三種類すべての発想法が用いられている。鈴木や萩生の研究では、近世になると、二段なぞはすっかり影をひそめてしまったかのような印象を受けるが、必ずしもそうではないと思う。三段なぞが主流であったことは疑えないが、このような形で、二段なぞも古臭い形式だと意識されつつも生き残っていたのだろう。^(注24)

そして、この文献⑤をはじめ、近世なぞの集成本(文献③④)には絵が含まれる点が注目される。本来、なぞなどは言語文化であり、言語だけで完結するはずのものであるが、絵入りになっているのだ。そして、絵の機能が、二段なぞと三段なぞとは異なるのである。

三段なぞの文献③では、問か答のいずれか(または両方)がそのまま絵になっているし、同じく文献④では問、答、心のいずれにもそのものの絵が付いている。これらの文献における絵は、特になぞなぞを解く上で役に立つわけではなく、存在価値としては目を楽しませる程度のことしか思い付かない。

これに対し、文献⑤の場合、絵はなぞなぞを解く上で必須なものが多い。問だけではどうい答が出せない以上、ヒントや絵を最大限に

利用して答を導き出せるようにするためであろう。

本稿では述べることができなかったが、なぞなぞと絵との関係は、さらに一步を進めて「絵によるなぞなぞ」の存在にまで及んでいる。そこには、もはや言葉はない。このような、言語文化と絵との関係は、注一拙稿でも述べたが、他の分野(ことわざ、格言、慣用句)にも見られる現象で、今後さらに考究すべき重要な課題である。

六 おわりに

以上、本稿では、発想法に注目して、三段なぞがなぜ、どのように成立したかについて考察した。その結果、三段なぞは、「連想」を用いた二段なぞをもとに、「連想」のプロセスをもう一つ増やすことによつて成立したことを主張した。これには、なぞなぞの享受法(遊び方)の変化が要因として存在していたと考える。

今後は、なぞなぞと絵との関係を考察したいと考えている。また、鈴木も指摘しているが、なぞなぞは、和歌、連歌、俳諧、川柳など、韻文とも深い関係を持っているようである。この点についても考察すべき課題として残った。これらについてはすべて別稿を期したい。

(注)

1 中世「なぞなぞ」の発想法について(『鳥取短期大学研究紀要』55・二〇〇七年六月)

2 鈴木(一九八一b)第八章、182ページ。

3 ちなみに、鈴木と小野の専門は国文学で、萩生はフリーのコピーライター出身である。

なぞなぞの本格的な研究は、一部の熱心な愛好家によるものが多く、言語文化としての位置づけを試みるものがまだまだ少ないことが明瞭である。現在の学問的枠組のうち、最

もなぞなどに近いのは国語国文学、あるいは民俗学であろうか。筆者の専門は国語学であるが、隣接領域の研究分野として開拓の必要を痛感するものである。

4 鈴木（一九八一b）第七章、149・150ページ。

5 鈴木（一九八一b）第七章、164ページ。

6 鈴木（一九八一b）第七章、165ページ（傍点ママ）。

7 鈴木（一九八一b）第八章、191ページ。

8 『千載和歌集』巻第十二恋二二条院讀岐・詞書「石に寄する恋と言へる心を詠める」・初句「我が袖は」。百人一首に入集。

9 鈴木（一九八一b）第七章、140・141ページ。

10 荻生（二〇〇七）「二段なぞ」の項、208ページ。

11 荻生（二〇〇七）「三段なぞ」の項、209ページ。

12 この点については、注一拙稿においても一言した。

13 鈴木（一九八五）所収。書誌情報も同書による。

14 鈴木（一九八五）所収。書誌情報も同書による。

15 以下の実例の下に付した番号は、鈴木（一九八五）における文献内のなぞなぞの通し番号である。引用にあたり、読みやすさを考慮して一部表記を変更した。また、なぞなぞの解釈も同書によった。

16 この「言換」「連想」の区別は微妙なところではある。大方の御批正を請う。

17 吉見（二〇〇二）の翻刻および解説による。

18 渡辺（二〇〇〇）所収。書誌情報も同書による。ただし本書は抄録のため、全貌は明らかでない。

19 三段なぞの発想法として、筆者のこれまでの調査では、「連想」以外のものはまだ見つかっていない。試みに、「操作」による三段なぞを想定してみようとしたが、うまくいかなかった。或いは、三段なぞは、本質的に「連想」によってのみ成り立つなぞなぞ形式なのかもしれない。今後の検討課題としたい。

20 同書236ページには「民間伝承として採集された三段なぞ（複式なぞ）の集成。」とある。全国各地から集められた三段なぞを五十首順に配列。全157例のなぞなぞを掲載している。

21 鈴木（一九八一b）の169～171ページには、三段なぞについて近世の文献に「二重一連」の呼び名があり、「二重なぞ」とも呼ばれる慣習があるが、鈴木自身の解釈により、そう呼ばない旨の記述がある。しかし、三段なぞの構造を、「連想」を二回行うものと捉えると、伝統的な「二重」の呼称は、むしろ当を得たものかもしれない。

22 鈴木（一九八一b）第七章、146ページ。

23 渡辺（二〇〇〇）所収。書誌情報も同書による。ただし本書は抄録のため、全貌は明らかでない。

24 鈴木（一九八一b）第九章、214ページ以下に、十返舎一九『東海道中膝栗毛』初編（享和二（一八〇二）年刊）で弥次喜多がなぞなぞをしながら旅をする場面が紹介されている。その中で、二段なぞをかけてきた喜多八に対して、弥次郎兵衛が「べら坊め、そんな古いことよりおれが掛けようか」（傍点岡野）と言って三段なぞをかける箇所が引用されている。少なくとも、江戸後期の終りごろには、二段なぞが古い形式だと考えられていた証左となろう。

25 鈴木（一九八一b）第一章、14ページ。

（参考文献）※配列は年代順

- ・鈴木棠三（一九八一a）『新版ことば遊び辞典』（東京堂出版・原版は一九五九）
- ・鈴木棠三（一九八一b）『なぞの研究』（講談社学術文庫492）
- ・鈴木棠三（一九八五）『中世なぞなぞ集』（岩波文庫黄130・1）
- ・小野恭靖（一九九九）『ことば遊びの文学史』（新典社）「Ⅲ、なぞ」の文学史」
- ・渡辺信一郎（二〇〇〇）『江戸の洒落 絵入りことば遊びを読む』（東京堂出版）
- ・吉見孝夫（二〇〇二）『三段なぞ資料、茨城県立歴史館蔵「なぞ」』（北海道教育大学紀要（人文科学・社会科学編）第五十三巻第一号）
- ・荻生待也（二〇〇七）『遊辞苑』（遊子館）「第10章 謎なぞ系ことばあそび」